

A-4 山元町坂元中浜地区

2012 年 2 月 14 日（火）

報告者名	高倉 浩樹	被調査者生年	1945 年（男）
調査者名	高倉 浩樹	被調査者属性	中浜神楽保存会
補助調査者	赤尾 智宏		

学校と神楽保存会

7-8 年ぐらい前になるが、小学校から相談があった。郷土のものとしてふさわしいものを伝承したい。これは学校の授業のなかに取り込むため、創作でも何でもいいが、せっかく伝承するのならよりふさわしいものということだったようだ。このような学校教育への神楽の採用は、20 年前にも 1-2 度あり、その時に教えた事があった。その教え子が現在 30 代で神楽保存会の中心でもある。今回の場合、小学校の校長から話があった。それで中浜神楽の演目から何かを教えることにした。どうやら学校では創作でも良かったらしいが、それがうまくできなかったようだ。それで神楽をやりたいというようになった。今回の場合、学校教育の「ゆとり」の時間ではじまったようだ。全部を教える事は難しいので、神楽のなかの「剣の舞い」を教える事にした。ちなみにゆとり教育は、平成 14 年から施行され平成 22 年度で終了。

自分としては最初生徒が学校の授業で神楽をやることには少し抵抗があった。その理由は以下の通り。どうやってやらせるか。2 人を並ばせて踊らせた。神楽は相互に作用しあうなかで踊る必要がある。決まった順序でやればいいというわけではない。もちつもたれつつというか。相手にあわせて適当に変える必要がある。それを集団でやらせることは難しい。笛太鼓をやるのではなく、レコードをかけながら音楽にあわせて踊るということになった。

実際には 20 年前に学校で習った男性 7-8 人がいたが、そのなかの 2 人が自分が習った時の経験を元にして教え始めた。20 年前に学校での取り組みをやった時には、自分としては後継者が欲しかった。しばらくつづけてやったが、小学生で覚えても中学・高校生になると続かない。そのなかで 1-2 人が続いた。それが現在までに続いてきた。

神楽保存会の被災

保存会のメンバーでは、上記の 30 代の若手の 1 人がなくなった。もう 1 人は山寺地区に暮らしている。名前は A 氏、35 歳ぐらい。とび職だった。

中浜地区では 10 軒の家がのこった。残った 1 つは区長の家。地区住民の 3 分の 1 は仮設に暮らしている。もう 3 分の 1 はちりぢりとなった。

区長について

区長は 3 月の総会の前に亡くなった。副区長が 2 人いるが、1 人は亡くなり、もう 1 人は残った。この残った人が現在の区長さんになった。

浜通りの場合、区長という名前はのこっているが、住民の役割は果たせていないと思う。丘通り（6号線向こう）は通常通り。

区長はいわゆる行政区長である。行政書類の配付をする。地元としては、自治会長ということになっている。町と住民のパイプ役。草刈りやゴミ清掃なども音頭をとる。天神社の祭典についても形式的にトップは区長。氏子総代はいるが、トップではなく補佐役。実際は別だが。地域のイベントは区長がやる。そうしないとまとまらない。寄付なんかももらう時には区長の名前が必要。

年に1回総会がある。3月の第3日曜。任期は2年、期限なし。これは住民年会費（4,500円から年に2回）を集めるので、その会計報告。区長の選挙は、選考委員会をつくって選んで押し付けるという感じ。

学校での神楽教育

学校で笛と太鼓を教えるのは難しい。楽譜などがないからだ。震災前の状況としてはこうした中で臨時に雇われていた女の先生が重要な役割を果たした。彼女は盛岡出身で「さんさ踊り」で笛をやっていた。まず保存会で笛の様子をビデオで撮影した。それをみて習ってもらった。ずっと以前、伝承の手段として、譜面に落とそうと思い試みた。しかしうまくはいかなかった。この女の先生は保存会の練習にも参加するなどしてとても熱心だった。この先生は震災前に別の小学校に異動した。

ゆとりの時間をつかって神楽の練習をした。中浜小学校は一クラス男女合わせて10人ぐらいだから、他の学年も一緒にして授業をした。男の子だけではなく、女の子も一緒におどった。笛は特に女の子がうまかった。全般的には女の子の方が熱心。完全とはいえないが、……こっちからするともう少し厳しく指導したいという思いがあった。ゆとりの授業の担当だったのは、学年主任の先生。こうした成果は、学校の運動会で披露した。一方隣の坂元小学校では、「ソーラン節」を教えている。

まだこうした授業のなかからは「伝承者」はでてこない。やはり中高と大人になる時期は神楽に関わるのは難しい。なお震災後、学校からは神楽を再開したいと連絡があった。震災前は通年でやっていたが、今は時々。学校の道具や衣装も流された。衣装は仮設にはいつている人＝年配者に頼んで白装束のはかまなどを作ってもらった。太鼓などは校長がどこから調達してきた。

今回の再開については校長が声をかけた。それで校長から地区の区長に相談し、そのなかでやってもらった。祭りは区長がとりまとめなので。祭りに関しては、普通区長は直接かわらないが、学校の生徒用の衣装の調達は手伝っていた。学校では太鼓笛などは神楽保存会のを使っていたが、津波で一切亡くなった。それで学校がどこからか調達してやったようだ。

神楽保存会の構成

笛が2人、踊りが2人。この4人は子どもへも教える事ができる人。それ以外に時々手伝う人もいる。自分が手出しするとやらなくなる。口出ししないようにする。

保存会のメンバー全体で15-16人ぐらいいた。しかし震災でばらばらになった。年配の人たちはいなくなった。30代の7-8人の若い人が現在中心。それ以外の7-8人が話者の60代の世代。ここで地元に残る人はほとんどいない。

要望

学校で神楽をやっているようなので、継続してやってもらって、時々きちんとした踊りにしてもらいたい。子どもは一所懸命だが、形をきちんとさせることが重要。形が崩れる。形がきちんとしていないという印象をもっている。

踊る内容と笛太鼓双方を伝えるのは、わたしぐらいしかいないのではないかな。そういうことできる人は少なくなっている。こうした役は誰にでもできるものではないと思う。子どもの頃からずっとやってきた経験が重要だと思う。もう一人の笛担当は笛は問題ない。踊りとなると部分的には知っているが、全体は知らない。

保存会の太鼓や衣装は流されてしまったが、その復興について具体的計画はない。3年前に文化庁に100万もらって直したばかりだった。100数万円のものが流されてしまった。面も衣装も。復興については県を通して希望を出した。

後継者が欲しい。直接たずさわる継承者が欲しい。

道具の作り直しにお金を出して欲しい。それを行政に要望したい。

校長について

現在の中浜小学校の校長は角田出身。中浜小学校から坂元にいった角田にいった(?)女性の校長。震災のあとは、坂元小学校と一緒に敷地で二校並列でやっている。

話者の被災について

地区の浜通り側に自宅。学校のすぐ近くだった。全部津波で流出した。屋敷の一つの棟には自分と母がくらし、別棟には兄貴の夫婦が暮らしていた。母親は1月に亡くなった。急に動けなくなって病院にいったでそれ亡くなった。兄貴夫婦も仮設に暮らしている。仮設にいと足にくる。寒い。

母親は元々は夕方になると押し車で散歩を良くしていた。仮設にきては「出て歩け」といっても出なかった。母は満で89歳、数えて91歳。3月に誕生日なので90歳になるところだった。父は12-13年前に亡くなった。

自分は震災の時に町会議員をやっていた。それで中学校の卒業式があり、午後からは町役場で議会の委員会があった。地震があって、車で家にもどる途中、渋滞した。それで回り道して下に降りようとしたら、真っ黒なものが見えた。津波だった。地震から1時間ぐらいたっていたと思う。

兄貴はにげろといわれたがにげなかった(?)。その後母と兄が坂元中学校に避難しているのを確認した。

中浜小学校では子どもが最上階の屋根の部分に避難しており、こどもを何とかして欲しいという連絡があった。役場にいった救出依頼を頼んだらすでに自衛隊に救助依頼をしていた。子どもは3階の屋根裏部分にいたが、水は2階まできた。次の日朝5時頃に相模原自衛隊がきて中浜小の60人ぐらいの子ども+住民30名ぐらいを救出した。避難所にいても、ずぶぬれの人が入ってきたりしていた。